

白馬セミナー特別寄稿



子どもの救いは神の御業

テッド・トリップ博士

クリスチャンの親の多くは、子育ての全責任を忠実に遂行すれば子どもを救うことができると信じています。それは次のような考え方によるものです。「神は救いという祝福の契約を代々にわたって約束された。だから、私が忠実に子育てをすれば、この祝福を子どもにもたらすことができるはずだ」。こうした考えは人々に安心感を与え、満足させます。

ところがこうした考え方は、福音というこの上もない恵みを覆い隠すので、破滅的と言えるでしょう。人を救えるのは神だけです。神は、イエス・キリストにあってご自身の栄光を知る知識の光を与えられます。私たち親がそうであったように、子どもたちもまた神の恵みと憐れみのゆえにキリストのもとに来ることができるのです。ヨハネは次のように語りました。「…この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」(ヨハネ1:12~13)

従順という自らの姿勢によって子どもを救えると思えることは、間違っただ子育ての動機を生み出します。すなわち、自分が正しい子育てをしないなら、子どもたちは神を知ることはないのだ、という恐ろしいほどに絶望的な考えを内に秘めるようになるのです。自らの忠実さが子どもたちを救いに導くと考えるなら、神の主権という素晴らしさと神の憐れみに対する信頼と平安は失われま

す。

こうした考え方は親に多大なプレッシャーを与え、子どもに多くを強制するようになります。子どもたちは、自分を愛してくれるはずの親に追い詰められ、あおり立てられ、しつこく苦しめられることになるのです。恵みにしかできない業を、親は自分の力で生み出そうとしてしまうのです。

子どもを救いに導こうと頑張っている若い親は、自分よりも年上の親が子育てに苦労し、子どもが信仰から離れている姿を見ると、つい批判したい誘惑にさらされるかもしれません。そのような親は後の日になって、今度は我が子が信仰の問題に直面し、苦しんでいる姿を見る時、怒ったり、混乱したり、ひねくれたりしてしまいます。「私たちはどこで間違っただのか？子どもを養うためにできることはすべてやったのに…」。彼らは自己批判と絶望にがんじがらめになり、祈りの力に期待せず、御言葉に誠実な神に安息を見出すこともありません。

このような時、どのような真実で思考を再調整したらいいでしょうか。救いは主のもので、神は罪人を救うことのできるお方です。救いは人間の行いによるものではありません。親の行いでもなければ、子どもの行いでもありません。「それなら、どうして最高の子育てをしようとして一生懸命働かなければならないのですか」。そんな質問が聞こえてきそうです。答えは明らかです。私たちは忠実であるようにと主に召されました。だからこそ、神の道に従って子どもを育てようと努力するので

す。私たちの内なる人は神の道を喜び、すべての召しに忠実でありたいと切望しています。神はそうした私たちの方法も用いられます。ですから私たちは、しっかりと子どもを養育し、家庭生活の中で子どもたちにキリストを指し示すことによって、懸命に自分の役割を果たそうと努めているのです。しかし、その良き行為で子どもたちが救わ

れるということではありません。

一日の終わりに願うこと、それは神に栄光をお返しすることです。私たちが行った良い業によってではなく、神の偉大な誠実さによって聖なる実を育て上げ、神がたたえられるようになることを期待しています。

申命記 6 章 テッド・トリップ博士

申命記 6 章は、神の契約の祝福を世代から世代へと受け継ぐことに真剣に取り組む人々のためのテキストです。この章は、子どもたちと一日中、神の道について語り合うよう呼びかけています。共に座っている時も、道すがら歩く時も、寝る時も、起きる時も、親は神について話して聞かせるのです（申命記 6：7 参照）。神の栄光とその素晴らしさを子どもたちに伝えていくことは、明らかに親が召された重要な使命です。

申命記 6 章には注目すべき点があります。親がどのような姿勢で子育てに臨むかということです。ニュースキャスターが、カメラの下にあるプロンプター（記事をモニターに映し出す装置）を淡々と読むような、そんな淡白な子育てを進めているわけではありません。

子どもに神の道について教える時、土台となるのは私たち親の姿勢です。まず私たち自身が神を喜び、神の素晴らしさを追い求めることが大切なのです。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記 6：4～5）

あなたの心が、神の主権の持つ不思議や信じられないほどの憐れみと恵みに捕らえられていないなら、あるいは神の深い愛があなたの内に形作られていないなら、あなたは子どもに対して神の栄光を印象づけることは決してできないでしょう。

あなた自身が神の言葉を大切に考えていなければ、子どももそれを重要とは思いません。すべては、まずあなたが神に圧倒されることから始まります。

それが申命記 6：6～7 のポイントです。「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい…。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるというのは事実です。心は常に宝物と結びついています。神を知る喜びを子どもたちに示すためには、あなた自身が神に魅了され、神に捕らえられていることが不可欠です。神との交わり、キリストの善と憐れみを知ること、そしてペテロが喜びと呼ぶ、言葉に言い尽くせない輝かしい体験（たとえそれが試練であっても）。これらは、子どもたちにキリストを知る喜びを心に刻む基礎となります。頭の中ではなく、心からときめき、燃え上がる想いで、日々、生活する必要があります。

ジョナサン・エドワーズの伝記の中で、彼は祖父のリチャード・エドワーズを次のように表現しました。「神の御前で、祖父は神を信じるだけでなく、喜んでいました」。神を喜ぶことは、何千もの言葉よりも説得力があります。

あなたの心が神の豊かな真理で満たされる必要があります。そうすることで、子どもにも真理を植え付け、神の道に歩むことの素晴らしさを印象

づけることができるからです。

クリスチャンの親であれば誰もが、子どもたちに神の素晴らしさを示すことについては同意するでしょう。その一方で、子どもたちが神を愛するように導けなかったことを痛感している人も多いのではないのでしょうか。自分は子育てに失敗した

という感覚を持ったまま、どこに向かいますか。内にこもり、罪悪感や自責の念を抱かないでください。神のもとへ行きましょう。あなた自身が神を愛せるように、そして子どもたちに神の栄光を示せるように。

クリスチャン女性と従順

.....
マージョー・トリップ女史



21世紀に入り、従順や服従という考え方は一般的ではなくなりました。世俗文化の考えでは、権威とは圧倒的な力から生み出されるもの、あるいは人々の承認を得て生まれてくるものです。権威に対する反応は二つあります。反抗か服従です。理性的で知的な人が、喜んで権威に服従するという概念はありません。

では、なぜ私たちは神様にあって妻が夫に従順に従うことについて考えるべきなのでしょう。神が持つておられる目的を理解するために、神の言葉を読み進めてみましょう。

妻に求められる従順：第一ペテロ1～3章

女性の従順について最も力強く教えている聖句の一つは、第一ペテロです。この書のテーマは、苦しみに対する勝利です。

従順について考える前に、まずは苦しみの中にいる民への神の愛、思いやり、献身を再確認することが重要です。人は苦しみに遭うと、何かが間違っているのだと考えがちです。しかし第一ペテロで神が明らかにされていることは、苦しみは起

こるものであり、そのような嵐を乗り越えるために神が霊的基盤を与えてくださるということです。

第一ペテロ2：21～25にある通り、キリストこそが私たちの模範です。「…キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました」。キリストは、正しい裁き主である神にご自身を委ねました。最大の試練を通った時にもキリストが父なる神に信頼したように、神の民も神に信頼を置くことが求められています。

第一ペテロ3：1を見てみましょう。「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです」。苦しみは私たちの判断を鈍らせ、迷わせます。だからこそ、この箇所では従順の目的を明確に言及しているのです。レースに走り疲れた時、あるいは従順に関するこの世の考えに惑わされそうになった時、私たちは一心に目標を見つめ

なくてはなりません。

第一ペテロ3:2~6は、神に信頼を置き、キリストを中心にした人生について説明しています。「それは、あなたがたの、神を恐れかきこむ清い生き方を彼らが見るからです」(3:2)。夫をキリストに勝ち取るため、妻は福音を提示する必要がありますが、興味深いことに神は「無言」を命じておられます！神が選ばれた方法は、主にある女性の「神を恐れかきこむ清い生き方」です。妻は自身の清さと神を恐れる姿を示すことで夫を勝ち取ることでしょう。妻の存在自体が夫に対する証しとなるのです。

続けて第一ペテロ3:3では、「あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく」と語られています。真の美しさとは外側を飾り立てるものではありません。「むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人からを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです」(4節)。妻の本当の美しさは、神への希望から来ています。彼女の目はキリストに注がれているので、その心には平安があります。

ペテロは言います。私たちが神を愛し、希望を抱き、キリストにあって平安でいる姿は、それ自体で証しになっているのだと！夫や子どもたちは、影響を受けているのです。私たち妻や母が、どんな種類の美しさにも、関心を持っているのか、私たちの「選択した美しさ」や私たち妻や母が持つ「興味」や「関心」に、良きも悪しきも影響を受けるのです。

第一ペテロに見る従順の模範

第一ペテロ3:5~6では、模範となる女性について語られています。「むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。たとえばサラも、アブラハム

を主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れないで善を行えば、サラの子となるのです」。敬虔な婦人たちは神に望みを置きました。神に身を委ねた先にあるのが従順です。

ペテロが、欠点を持つサラを模範として挙げたことは興味深いことです！高齢となった彼女は、子どもを与えるという神の約束を笑いました。しかし、子どもが生まれた時には神を賛美しています。神に希望を持つと、他の事には期待しなくなります。心配や恐れ、期待、欲望を神の手に委ね、神が私たちに心配してくださることを覚えるのです。

独身女性は、夫を得ることに希望を置くのではなく、神に希望を置きましょう。結婚にふさわしい男性とは、あなたの人生の中で一番になろうとする人ではなく、キリストの次に自らを置く人です。

従順を困難にする恐れとは？

妻が恐れていることは、夫に聞き従うことで大変な目に遭うのではないかと、ということです。「夫の言う通りにしたら、家族がひどい目に遭うのでは。きっと家庭が崩壊する」。しかし、神はあなたを守り、家族の必要も満たしてくださるお方です。その神に期待し、信頼しましょう。

別の恐れは、自分が従順に行動すれば、愚か者だと誤解されるのではといった懸念です。私たちはこう考えます。「私はバカじゃない。私にだって能力はあるわ」。従順の問題は優劣の問題ではありません。神には結婚の目的があり、妻が夫に従うようにデザインされたということです。

もう一つの恐れは、従順が同意と勘違いされるのでは、というものです。「夫には、私が強く反対していることを知ってもらいたい！」。そのように頑固になり、怒りの言葉を吐くことが、相手に反対を表明する唯一の方法だと考える方がいま

す。しかし神の言葉は、私たちの上に置かれた人々と意見が一致しない時は、やさしい態度で適切に訴えるよう素晴らしい訓練と原則を与えてくれています。

同じような恐れです。「もし夫が神の言葉に反することを私にさせようとしたら?」。私たちは良いことをするためには苦しみも伴うことに、心備えをしておく必要があります。神の言葉に従わないように夫が妻に要求する権利はありません。夫に優しい態度で、的確に訴えていく訓練が必要です。

そのような状況にある場合は、牧師や信頼できるクリスチャンに助言を求めてください。ただし、次のことを確認しましょう。

- ・自分の態度や、夫に同意しない意図。
- ・創造的な代替案を試したか?
- ・神の助けと守りのため、また夫のために祈ったか?

本当に敬けんな従順とは、神への希望、将来を恐れない心、内なる静けさと柔和さの中に見出されます。それは神を知り、愛することから生じる実です。

妻が夫に従う姿勢は、キリストの生涯に深く描かれています。キリストも不正に苦しむことがありましたが、神に委ねました。結局のところ従順とは、神を深く信頼し、キリストに不可能がなく、私たちの想いを越えた御計画を持っておられるとの真理を知っているかどうかにかかっています。

従順のジレンマ

従順には一つのジレンマがあります。従順の目的は、神を礼拝するためであり、家族という共同体の利益のためです。神はすべての権威に対し、自分の権威下にいる人々を大事に扱うように命じられました。夫に対しては、「キリストが教会を愛し…たように、あなたがたも、自分の妻を愛し

なさい」と命じています。従順とは神に対する敬意を表した行為です。それは神への信仰に基づいています。成功は、神がすべてに計画を持たれていることを認識するかどうかにかかっています。神様は妻が何をどのようにすべきか、役割と使命を明確に表記しています。その実行には、霊的な努力と戦いと神様に対する信頼が必要です。

地上の権威ではなく、キリストに従うための聖書的ガイドライン

境界線（道徳的または倫理的）に問題があり、夫からの精神的、肉体的、病的な支配・暴力がある場合は、従いません。神の言葉が特別に命令し、禁止を与えているどんな事柄についても、その領域は盲従しないように気を付ける必要があります。

夫の知恵や判断に問題がある場合、寛容な姿勢で訴えます。神の言葉の原則に照らし、すべては良心と信仰によって吟味していきます。

もし権威者である夫が、妻の意見と異なる主張を続け、もし、それが罪を犯させる事柄や病的な事柄ではないなら、その主張がたとえ賢明でなくても、その夫の主張に従うことは罪ではありません。権威者が自分の訴えに耳を傾けないなら、聞き従いましょう。権威者については、神がその姿勢に沿って、裁かれます。

応用

神の言葉に照らして、従順に関する自分の考えを評価してみましょう。

私が自分を突き動かしているものは、他者に仕える謙遜な心でしょうか、それとも自己主張や自分を守る心でしょうか。私は祈りながら自らの心を探ります（詩 139：23,24）。

私は夫の計画を理解します。夫と同じ立場に

立って問題に取り組み、たとえ同意できないことでも、夫の目を通してその問題を見るようにします。従えない時、あるいは夫のやり方が間違っているとと思われる時は代替案を提示します。

私は聖書のパターンを学び、それに倣って要求するようにします（王に異を唱えたダニエルやエステル妃たちを参照：ダニエル1：8～14、エステル記）。

私は信頼できるクリスチャンのカウンセラーと話したいと思う時もあるかもしれません。信心深い助言は単なるゴシップとは異なります。優れたカウンセラーは、神のみこころにかなう選択肢を探すお手伝いをしてくれることでしょう。

私自身に最も重要なことは、神の内に希望を見出すことです。

従順は心の問題です。従順でありたいと求める時、常に祈りの中で「主のように」という短いフレーズを口にしてみます。神はそのフレーズを私たちの羊飼いとて、私たちの心に与えられました。

苦痛は、従順に行動しようとする時に生じます。自分の思った通りに行えないからか、あるいは、聖書的に行動しない夫故なのか。その場合は深い苦難が伴う場合が多いです。しかし、それらを持つ

てしても、私たちの従順を押しとどめることはないのです。

ペテロは言います。私たちが苦しみで召されたのは、キリストの足跡に従うためです。（第一ペテロ2：19～21参照）。3章では次のように言っています。「いや、たとえ義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。」（3：14）

神の言葉は、この墮落した世界の不正を見逃すことはありません。不義、不条理に直面した時、聖霊によって神の解決策が与えられます。神のことばと方法は人間の知恵やこの世の解決策を越えた、深い解決策を与えます。神の解決法は、穏やかな聖霊によって、キリストが心や行動を模範に、聖書のことばを適応させ、真実の愛と関心と同情に満ちた想いを私たちに与えます。自分自身の考えとは違う相手、たとえ敵に対してでもです。

神の方法は、神からの確かな約束として、私たちの魂に安らぎと平安をもたらします。聖霊を通して与えられる神のすべての力が、私たちに恵み、与えられようとしています。私たちが神の道に歩む時、神は祝福し、必要を提供し、守りを与える約束してくださっています。



「聖書が教える 親と子のコミュニケーション」

テッド・トリップ博士 著

本体価格 1600円 税込 1,760円

＝目次より＝

【第一部】 聖書的な子育ての土台

- ・行いの奥にあるもの
- ・子どもの成長
- ・責任者なのです
- ・目標を吟味する
- ・目標を見直す
- ・非聖書的な方法を捨てる
- ・聖書的な方法
- ・心を養い育てる

【第二部】 成長段階に応じた子育て

- ・幼児期から幼年期
- ・児童期
- ・ティーンエイジャー